第 20 回　歴史リレー講座「仏教伝来―『唐大和上東征伝』を基に―」　石田 太一氏（H28.5.15）

『唐大和上東征伝』は、鑑真和上の 6 回に及ぶ渡日計画（うち 5 回は密航）の一部始終を記した書物です。奈良時代に淡海三船という日本人が著しました。今回は和上の生涯と仏教伝来、聖徳太子との関わりについてお話しします。

仏教は釈迦が悟りを開いた地、インドのブッダガヤから先人の僧侶たちによって人々に伝えられました。7 世紀の中国、玄奘三蔵（三蔵法師）が本物の仏教を求めて長安からインドまで往復 3 万 km の旅を続け、8 世紀になると、鑑真和上が故郷の揚州から日本までの船旅に挑戦します。艱難辛苦を乗り越え、ようやく日本の地を踏んだ和上は、仏教の正しい「戒律」を日本に持ち込んだ伝道者でもあります。ちなみに玄奘三蔵ゆかりの寺は薬師寺、鑑真和上ゆかりの寺は唐招提寺です。唐招提寺には、和上が剃髪する様子や命がけで渡航する様子が描かれた『東征伝絵巻』（全 5 巻、鎌倉時代）が残っています。

そして、鑑真和上を学ぶ際に欠かせない史料が冒頭の『唐大和上東征伝』です。没後 20 年ほどで成立したので、かなり史実色の濃い内容となっています。和上に随従した弟子の思託が体験を基に底本を作ったものの、悪文であったため親しかった淡海三船にあらためて執筆を依頼しました。実は、奈良時代は日本語で文章を書くことはほぼなかったため、当然この書も漢文で書かれています。

さて、僧侶としての鑑真和上の生涯です。14 歳で得度したのち長安の寺で一人前の僧侶となったのが 21 歳のとき。40 歳の頃には長安から故郷の揚州に戻って僧侶の育成を続け、15 年が過ぎた頃に人生の大きな転機が訪れます。742 年、留学中の日本人僧、栄叡と普照に請われて渡日を決意するのです。その頃、仏教はすでに日本に伝来していましたが、2 人の使命は、さらなる布教のため優秀な僧侶を自国に招聘することでした。6 世紀の聖徳太子の遺言「200 年後に日本の仏教は大いに盛んとなる」と力説した結果、とうとう和上は承諾します。このとき和上 55 歳でした。

743 年、最初の渡航は「師匠をそそのかす日本人がいる」と、出発前に鑑真和上の弟子が役人に密告した

ため、あえなく頓挫。2 回目は遭難、3 回目は難破、4 回目は再び弟子の密告で失敗。5 度目の挑戦は 61 歳のとき。中国南方の海南島に漂流後、揚州へ戻る途中に失明、さらに栄叡と愛弟子の死という不幸に見舞われます。

753 年 10 月、諦めることを知らない鑑真和上は日本に帰還する遣唐使船に便乗します。沖縄、屋久島、大宰府、瀬戸内海、難波津、平群、王寺、法隆寺近辺を経由して翌年 2 月に平城京に到着。波乱万丈の計画は 6 回目にしてようやく達成されました。このとき和上 67 歳、最初の計画から実に 12 年の歳月が過ぎていました。

「山川異域　風月同天　寄諸仏子　共結来縁」（日本と唐は風土は違えども、同じ風を感じ、同じ月を見ることができる。この袈裟を縁（えにし）として未来永劫ともに歩んでいきましょう）。この漢詩は仏教信仰に篤い長屋王が詠んだもの。彼が中国の僧侶に寄付した千枚の袈裟の縁に刺繍されていました。鑑真和上の日本在留期間は 10 年ほどでしたが、この詩に心を動かされた和上は布教に一層熱を込めたと言われます。晩年は 71 歳で東大寺戒壇院職を辞したのち唐招提寺を創建、76 歳で西面結跏趺坐（せいめんけっかふざ）して亡くなりました（763 年）。

その鑑真和上が命がけで日本に伝えた仏教の戒律（五戒）が、不殺生（ふせっしょう）（生き物をできるだけ殺さない）、不偸盗（ふちゅうとう）（盗みをしない）、不邪淫（ふじゃいん）（不適切な関係を持たない）、不妄語（ふもうご）（嘘をつかない）、不飲酒（ふおんじゅ）（酒を飲み過ぎない）。「私はこれらの戒律を守ります」と誓う儀式が受戒です。

情報が簡単に手に入る現代、歴史を学ばずして幸福な未来は訪れません。和上は大海原で溺れかけましたが、私たちは今、情報の海で溺れかけています。技術は進化したものの、私たちの脳や心は和上の頃から変わっていません。1250 年前の風や月を感じながら、みなさんには鑑真和上のように諦めない心で五戒を守って進んでいただければ幸いです。

仏教伝来　―『唐大和上東征伝』を基に―　　平28.5.15

唐招提寺 副執事長　石田太一

【一】『唐大和上東征伝』（奈良時代に記された和上の伝記・淡海三船撰述）

・揚子江沿岸部の揚州で生まれる（688年）。

・**14歳**のとき、揚州の大雲寺の仏像を礼拝して出家する。

・**21歳**で長安の実際寺で具足戒（一人前の僧侶資格）を授かる。

・**55歳**のとき、揚州の大明寺で日本僧の栄叡・普照に請われ、渡日を決意する。

「仏法東流して日本国に至る。その法有りといえども伝法の人なし。日本国に昔、聖徳太子有り。曰く二百年後日本に聖教興る。今この運に鍾る。（中略）昔聞く、南岳慧思禅師遷化の後、倭国の王子に託生し、仏法を興隆して衆生を済度す。」（『東征伝』）

※聖徳太子（574－622）は606年に法華経などの講義を行った。

※慧思禅師（515－577）は天台大師智顗の師で、道教五岳の一つ衡山で法を説いた。

・**56歳**の第一回渡航計画は、弟子の密告で挫折する。

・同年12月、第二回渡航は、揚子江河口で遭難。さらに船を修理して出航するも、難破して阿育王寺に収容される（第三回渡航失敗）。

・再度準備して阿育王寺から冬山を越えて温州に向かうが、弟子の密告で捕まって揚州の龍興寺まで戻されてしまう。

・**61歳**なった和上は五度目の渡航を企てる。春に揚州を発って東シナ海に漕ぎ出したが、強風で進路が外れ、半月ほど漂流し、11月になって海南島に漂着する。歓待されて寺院の修復や仏法を授けるなど一年間をここで過ごす。その後、陸路で2400km離れた揚州に戻るが、道中で日本僧栄叡が寂し、和上も失明する。

「時に和上頻りに炎熱を経て眼光暗昧なり。胡人ありて能く目を治すといふ。遂に療治を加ふるに眼遂に明を失せり」（『東征伝』）

日本僧の栄叡や愛弟子の祥彦にも先立たれ、大きな損失を出した計画失敗であった。

・**66歳**になった和上は日本が派遣した遣唐使の第二船に便乗する。10月19日に揚州を出航し、11月10日に遣唐副使の大伴古麻呂の船に乗り、阿児奈波（沖縄）に同21日到着。半月後に出航し、屋久島を経て12月20日に南さつま市坊津秋目浦に入港した。その後、大宰府を経て瀬戸内海を航行し、難波津から再度上陸して、754年2月4日に平城京到着、天皇百官僧徒の歓迎を受けた。（大仏開眼の2年後）

『東大寺要録』によると、1日に難波、3日に河内（政庁で慰労を受ける）、4日に平群（平凉）到着とある。→奈良街道竜田越えか？

55歳の決断から12年、五度の失敗で弟子36名を失いながらの達成であった。

随従の弟子は法進、曇静、思託、義静、霊曜、法載等の十四名、優婆塞（在家信者）

の安如宝（ウズベキスタン人）、崑崙人軍法力等、国際色豊かな二十名。

将するところは、如来の肉舎利三千粒（釈尊の遺骨のこと）、…阿弥陀如来の像一鋪（刺繍した布）、彫白檀千手の像一躯、…四分律一部六十巻、…天台の止観・法門十巻…、菩提子三斗、青蓮華二十茎、…王右軍の真跡の行書一帖、

・**71歳**で東大寺戒壇院職を引退し、西ノ京に「唐招提寺」を創建する。

・**76歳**5月6日（旧暦）、西面結跏趺坐して円寂する。三日後に火葬されて境内艮隅に埋葬。今も静かな鑑真大和上御廟である。

山川異域　風月同天　寄諸仏子　共結来縁

「日本国長屋王、仏法を崇敬して千の袈裟を造り、この国（中国）の大徳衆僧に来たりて施す。その袈裟の縁上に四句を繡着して曰く、山川さかいを異にすといえども風月天を同じうす。諸々の仏子に寄せて共に来縁を結ばん。これを以って思量るに、誠にこれ仏法興隆有縁の国なり。」（『東征伝』）

【二】鑑真和上から現代へのメッセージ　→戒律のすすめ

僧侶の規律は煩雑で細部にわたっているが、在家信者には五項目から成る「五戒」が決められている。これは僧侶と違って、道徳の徳目であり罰則がない。

①「**不殺生**」生き物をことさらに殺してはならない。

②「**不偸盗**」盗みはしないよう努力する。これは有形無形両方が対象である。仕事の成果や名声、遅刻などによる時間の浪費は無形の盗みである。

③「**不邪淫**」不適切な関係を持たないようにすること。

④「**不妄語**」嘘をつかないようにする。

⑤「**不飲酒**」酒を飲みすぎないようにすること。百薬の長とも言われる酒も過度の飲酒は罪を重ねる要因となる。

「弟子〇〇、尽未来際、よく保や否や」「よく保つ」

仏教では人間の行為のことを「業（ごう）」と呼び、特に身体による動作を「身業」、口から出る言葉による動作を「口業」、心の働きを「意業」という。五戒や僧侶の戒律はこのうちの、身業と口業を縛るものであって、続けることで善行が習慣となり、やがて意業が改善されて心の働きが清くなり、大願に近づくのである。

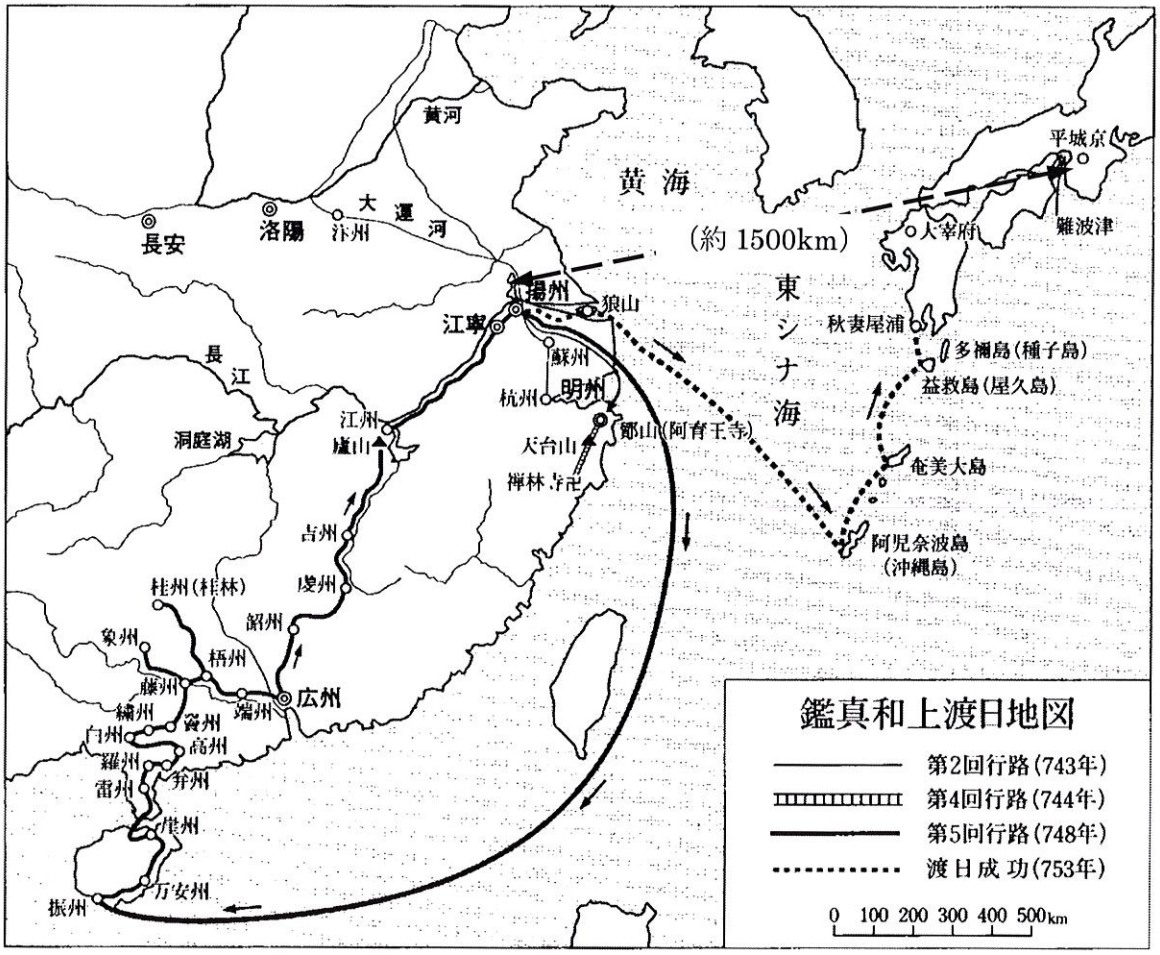
お薦めの書籍

『鑑真』東野治之著・岩波新書

『天平の甍』井上靖著・新潮文庫

『唐招提寺』唐招提寺編・学生社

鑑真和上渡日地図（『鑑真』《吉川弘文館》から複写）



インド（ブッダガヤ）⇔平城京＝約 5,000km（航空機で約 18 時間）
インド（ブッダガヤ）⇔長安＝2,500km
長安⇔揚州（大明寺）＝約 1,000km